

CSE

Council of Science Editors 2025 Annual Meeting

May 4-6 2025

in Minneapolis



5月4～6日にアメリカ・ミネソタ州ミネアポリスにて、CSE (Council of Science Editors = 国際科学編集者会議) が開催され、今年も杏林舎から2名が参加しました。ミネアポリスはアメリカの中西部北部に位置しています。着陸前の機内からは広大な平地が広がっている風景が見えました。また市内にはアメリカを縦に左右に分けるミシシッピ川が流れていて、川沿いは公園が整備され、地元の方々がジョギングやウォーキングを楽しんでいました。街の中心部には永年にわたって世界トップの病院にランクされ続けているMayo Clinicがあります。

全体的なカンファレンスの印象としては、参加者の年齢やキャリア層が大きく広がった印象を受けました。これまでは年齢層、そして経験値が上の方々が参加していたイメージがありましたが、今回は若年層の参加者も多くみられました。その影響かジャーナル編集事務局や関連業務におけるキャリア構築に関するセッションが行われていたことが印象に残ります。

ありました。このセッションでは講演者によって、世界的に著名なジャーナル7誌 (Science, PLOS ONE, Lancet, American Heart Association, JAMA, Nature, New England Journal of Medicine) が定めるAI利用に関する投稿規定の比較説明がありました。どのジャーナルも独自の内容が記載されている訳ではなく、共通してICMJE Recommendationsに合わせた規定を設けている事が分かります。講演者によるとAI利用における7誌の規定の厳しさは大きく3段階 (Conservative,

Moderately Conservative, Liberal) に分ける事が出来る、と分析をしていました。しかし、その内容は上述のとおり、基本的な内容はICMJEに合わせた内容であり、大きくは言葉遣いと表現の違いであることが分かりました。

注目される学術出版の動向

昨年同様、今回のカンファレンスでも査読の多様性やジャーナル運営におけるDEIA (=Diversity (多様性), Equity (公平性), Inclusion (包括性), Accessibility (アクセシビリティ)) など、現在の社会的、

そして学術出版的なトレンドに合わせたトピックが多くありましたが、それらの中でも、特に注目を集めていたトピックは、昨年同様に生成AIの学術出版業界における利用規制に関する議論です。

学術出版におけるAIの活用事例

このテーマについては2日間で2つのセッションがありましたが、両日ともに会場は満席で、最終的には机をどかし椅子を追加する程の盛況ぶりでした。

まず編集事務局におけるAIの利用方法が複数のジャーナル編集事務局の方々から紹介されました。会場の参加者はメール作成、文章校正、そしてデータ分析に日常的に使われているという方々が殆どであり、また投稿受付の段階において、重複出版や剽窃チェック、ペーパーミル論文の検知に使われているという声が多く聞かれました。

次に著者によるAIの活用方法がAIの歴史と並行して紹介され、実はスペルチェックや文章校正機能は昔から使われているAI機能の代表であると説明されました。そして現在ではAIによる翻訳機能が活性化しており、AIの翻訳能力は日々大きく進化し、また多くの非英語圏の研究者が利用している事が共有されると同時に、非英語圏の研究者にとって英語で論文を投稿することへのハードルがここ数年で大きく下がり、また今後も下がるであろう、との考えが共有されました。

また学術出版業界のベンチャー企業に

おいては、論文投稿前の著者向けAIツールの開発が進んでおり、文法や表記のゆれの検知、体裁の統一、文献のスタイルチェック、各種開示事項の確認等をワンストップで可能とするツールの開発が活発になっていることが紹介されていました。

講演のパネラーはAI開発企業の方、出版社、ジャーナルの運営事務を担当している方々などで構成されていましたが、皆、ジャーナル運営におけるAIの利用については大賛成であり、聴講者に対して積極的な利用を促していました。また同時に、AIは便利である一方まだまだ開発途中という事もあり、バイアスが強まるケースや不適切なフィードを返す場合も十分考えられるため、全てをAIに頼るのではなく、やはり最後は人間による確認、評価、そして判断が必要である、という座長の発言に皆大きくうなずいていました。

また、別のAIに関するセッションでは論文執筆と査読におけるAIの利用ポリシーの現状の解説、そして将来的な展望について講演が

生成AI利用のルール化の重要性

これらのジャーナルの投稿規定における生成AIの利用に関する規定をまとめると

- ① 研究過程、データ分析・解析においてAIを使った場合、使った目的と方法、AIソフトウェア名、日付、バージョン名などをMethodで開示する必要がある
- ② 画像生成AIの利用は不可
- ③ 画像修正におけるAIの利用は不可
- ④ 論文執筆において文章の翻訳や校正にAIを使ってもよい

という事が書かれています。これらは主にICMJE等の国際ルールに沿って書かれている様です。しかし読者の皆さんもご存じのとおり、生成AIの精度は上がっていますが現状では100%正確ではないた

め、最終的に「全ては著者の責任」である事には変わりありません。

これらからすると学術出版業界においても、AIは既にあらゆる場面において使われており、読者の方々も利用した経験があると思います。また、そのスピード、利便性、情報量は日々進化しており、利用機会はより身近なものとなっています。それが故に、学術出版においても数年前の「生成AIの利用を禁止する」ための議論から、「どの様に使いこなすか？」にテーマが大きくシフトしたという印象を受けました。

この様に利用の禁止から容認にシフトしている今だからこそ、きちんとしたルールを決める事がジャーナル運営には必要だと考えています。皆さんのジャーナルにおいても生成AIに関する規定は明記されることを強くお勧めします。

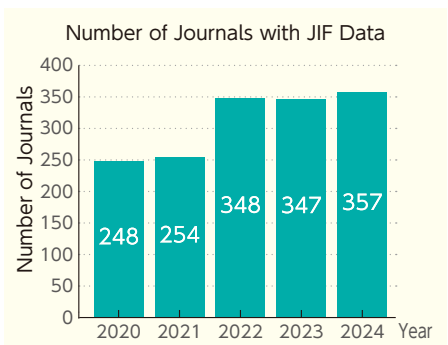


JIF2024 Journal Impact Factor

日本のジャーナルの動向

2025年6月、ジャーナル・インパクトファクター2024年版 (JIF2024) がWeb of Science (WoS) より発表されました。今回は22,249誌のジャーナルのインパクトファクターが発表されています。本稿では、英文・和文を問わず、JIFを持つ日本のジャーナルの傾向について、グラフデータを中心に分析します。

1. JIFを持つ日本のジャーナル数の推移



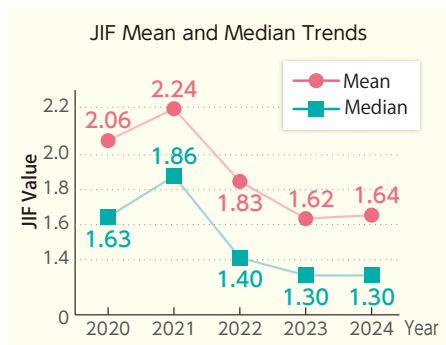
上記グラフは、JIF2020 (2021年発表) からJIF2024 (2025年発表) までの、JIFが付与された日本のジャーナル数の推移を示しています。最も顕著な変化は、JIF2021からJIF2022にかけて100誌近い大幅な増加が見られる点です。

この急激な増加の要因は、JIF付与対象の拡大にあります。JIF2022から、これまで対象外であったWoSの新興ジャーナル向けのコレクションESCI (Emerging Sources Citation Index) 掲載ジャーナルにもJIFが付与されるようになったのです。(別掲1)

その後、JIF2024までの3年間を見ると、掲載数に大きな変化は見られません。しかし、以下のコラム(別掲2)で解説しているように、JIF2022以降は、WoSへの掲載から除外される雑誌が急増しているため、表面的な数値の安定性の裏では、JIF保持ジャーナルの激しい出入りが起きていることが推測できます。



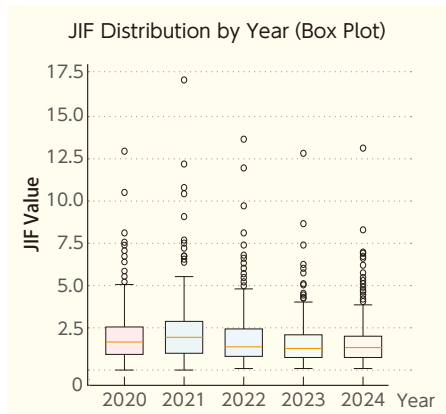
2. 日本のジャーナルのJIF値の5年間の推移



このグラフは、日本のジャーナルのJIFの平均値(赤線)と中央値(青線)の折れ線グラフです。

グラフから明確に読み取れるのは、2021年をピークに平均値、中央値ともに下落傾向にあることです。新興ジャーナルへJIFが付与されたことで、全体的にJIF値が低下傾向にあることは理解できます。これは、一般的に新興ジャーナルのJIF値が既存のジャーナルと比較して低い傾向にあるためです。

3. 箱ひげ図から見る分布の変化

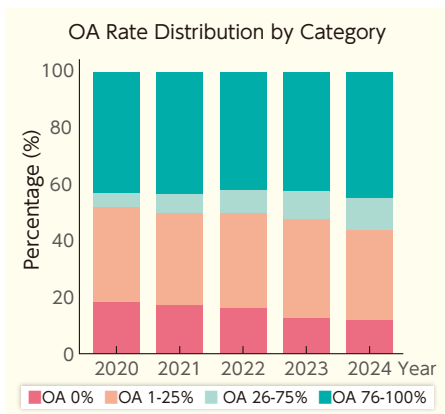


しかし、新興ジャーナルが加わったという理由だけでは説明しきれない事象が起きているようです。上の図は、JIF値の

分布を表す箱ひげ図です。簡単に言えば、四角い箱の中に入っているのは平均的なJIFを持つジャーナルで、上に丸印で分布しているジャーナルは、特異なJIF値を持つジャーナルです。

この箱ひげ図で特に注目すべきは、上部に位置する外れ値(特に高いJIF値を持

4. オープンアクセス(OA)率の推移



続いて、JIF計算対象となる論文のOA率の推移を示すグラフです。上部(青)がOA率の高いジャーナルの占める割合の推移で、下部(ピンク)がOA率の低いジャーナルの占める割合です。

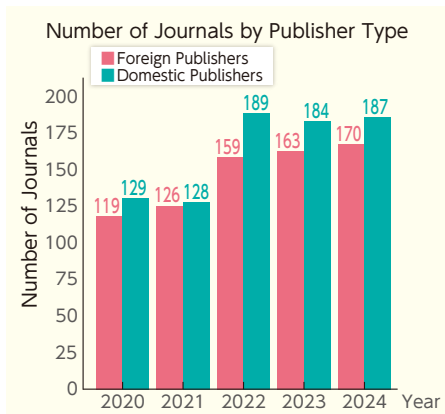
このグラフから、確実に日本のジャーナルにおけるOA率は上がっている傾向にあることが読み取れます。年を追うごとに、OA率の高いジャーナルの割合が増加し、OA率の低いジャーナルの割合が減少していることが明確に示されています。

OA化が論文の閲覧数を増加させることは多くの論文で示されていますが、JIFに与える影響はまだ確認されていません。

しかし「読んだ論文を引用する」という原則を考えると、ジャーナルとしては「いかに読まれるか」を考えていくことが引用を増やす上で不可欠です。

前回のS1MNEWS No.29の記事「公的資金」と「即時OAの義務化」でも触れていますが、世界的にOA化は避けられない状況です。今後OA率は加速度的に上がっていくことが予測されます。

5. 海外出版社による出版と学会出版



最後に、海外出版社による出版と国内の出版者(主に学会)による出版のジャーナル数の推移をグラフにまとめました。

グラフから、JIFを持っているジャーナルには学会出版(青)のジャーナルが多

つジャーナル)の水準が緩やかに下がっていることです。これは、日本のジャーナルの「特に高いJIF」の水準が低下傾向にあることを示しています。つまり、平均値の低下だけでなく、トップクラスのジャーナルのJIF値自体も相対的に低下している可能性があるのです。

いことが見て取れます。しかし、注目すべきは2022年以降の変化です。2022年のESCI掲載誌へのJIF付与の際には、学会出版のジャーナルと海外出版社のジャーナルの数に大きな開きがありました。ところが、2023年以降はその差が縮まっていることがわかります。

これは、JIFの保持に成功しているジャーナルの割合が、海外出版社のジャーナルのほうが高い傾向にあることを示唆しています。

先ほども触れたように、JIF対象コレクションのジャーナルは常に入れ替わっています。国際的なベストプラクティスから外れた運営をしていると、JIFを剥奪されることになります。学会で自前で情報を収集し、ジャーナル運営をアップデートするのは容易なことではありません。

このベストプラクティスを守るための情報収集力の差が、海外出版社による出版と学会出版のJIF保持の成否の差として、グラフに表れているように見えます。

ここまでをまとめると、JIF2024のデータから見えてくる日本のジャーナルの動向は、以下の4点に整理できます。

1: ジャーナル数の推移

JIF2022での大幅増加後、表面的には安定しているものの、実際には激しい入れ替わりが起きている可能性が高い

2: JIF値の傾向

- 平均値・中央値ともに2021年をピークに下落傾向
- 新興ジャーナルの追加による影響だけでなく、トップジャーナルのJIF値も相対的に低下している可能性

3: OA化の進展

着実にOA率は上昇しており、この傾向は今後も加速することが予測される

4: 出版形態による差異

海外出版社によるジャーナルが、学会出版のジャーナルと比較してJIF保持の成功率が高い傾向が見られ、国際的なベストプラクティスへの対応力の差が表れている

今回の調査で、JIFなどの引用メトリクスをはじめとする質的向上、OA化への対応、そして国際的な出版基準への適応という3つの課題が、日本の学術出版にとって重要であることが確認できました。

いかがでしたでしょうか。今回は日本のジャーナルのJIFの傾向と題して、全体をざっくりとご紹介しました。

みなさまのジャーナル運営のヒントになれば幸いです。

編集後記

今号では、CSE(国際科学編集者会議)への参加レポートからAIの活用事例や生成AIの利用に関する規定についてご紹介しました。

学術出版分野でも既にAIの活用は著者側、編集事務局側共に進んでおり、積極的な利用を促す傾向にあります。同時に、AIは便利である一方開発途上のため、全てをAIに頼るのではなく、最後は人間による判断が必要という点に留意する必要があります。著者が論文作成に生成AIを利用する場合は慎重を期す必要があります。ジャーナル運営側のみならずにも生成AIに対するルール作成の必要性を認識するきっかけとしていただけたのではないのでしょうか。

また、JIF2024の日本のジャーナルにおける分析内容についてご紹介しました。これからの日本の学術出版にとっては特に国際的な出版基準への対応が重要ではないかと思えます。

今後もこれらの動向を注視しながら、皆さまに有益な情報をお届けしてまいりたいと思います。

S1M NEWS

2025年9月30日発行 第30号

発行 株式会社 杏林舎
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10
Tel. 03-3910-4311 Fax. 03-3949-0230
https://www.kyorin.co.jp/
編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎
E-mail s1-support@kyorin.co.jp

ジャーナル・コンサルティング サービス Seekl

Seekl

ジャーナルコンサルティング

Seeklは「質の高い論文が自然に集まるジャーナルづくり」をコンセプトとしたコンサルティング・ファームです。

お問い合わせ

03-3918-5005(直通)

info@seekl.jp

JIFについてお悩みのことがあれば、まずは気軽にご相談ください▶

